

総 評

十勝中学校文化連盟新聞専門部長

福留 克志

たくさんの先輩に支えられ、新聞づくりの歴史を積み重ねてきた全十勝小中学校学級学校新聞コンクールは、34回目を迎えることとなりました。今年度も各学校で新聞づくりに励む児童生徒のみなさんのすばらしい作品が、学校・学級新聞部門と学習新聞部門合わせて440作品を超える数となりました。今年度も、昨年度から引き続き新型コロナウイルス感染による臨時休業や学級閉鎖があり、思うように活動時間がとれない学校も多かったのではないかと思います。ただ、そんな中、新聞の取り組みに時間を使い、作品を仕上げ提出してくれたことを心からうれしく思います。そこに今までみなさんが新聞づくりを頑張り、実績を積み上げてきた「十勝」地域の底力を感じます。

新聞製作の活動は、「記事の題材を見つけ、それを文章にし、取材したり、調べたりすることにより、読み手に発信する」というものです。これは同時に、今までの学習で身につけた知識・技能を総合的に活用し、表現する活動であり、自分自身を見つめなおしたり、仲間づくりをする場でもあります。ただ、時間的な制約もあり、限られた時間の中でいかによいものに仕上げるかに知恵と工夫が必要となります。

今年のコンクールの審査会でも今まで同様、審査員全員がみなさんの新聞づくりに対する熱意と精一杯頑張る姿勢を感じつつ、時間をかけて全作品に目を通しました。

審査は、「内容・企画力」と「編集技術」の大きく2つの観点でそれぞれの学年の発達段階に合わせて行っています。内容・企画力の面では、学校や学級の創造性や独自性があるかどうか、社会問題など今の時期にぴったり合った内容となっているか、地域性が打ち出されているか、取材に基づき、説得力のある内容であるか、さらに学年に応じた問題提起と自分たちの意見や考えなどがあるかどうかです。特に、身近な出来事や調べたことをありのままにわかりやすく、そして生き生きと表現されているか、というポイント、編集技術面ではレイアウトなど読みやすい紙面構成か、見出しなど工夫があるか、文字は見やすく丁寧に書かれているか、誤字脱字がないか、などの点をポイントに総合的に審査しました。

今年度の新聞の特徴としてまずあげられるのは、レイアウトなど基本に忠実に読みやすく仕上げた作品が多かったということです。また、見出しや表記の文字も丁寧に仕上げられており、目を引きました。学習新聞では、自分の目で見たことをわかりやすく詳しく解説してそれを文章にするだけではなく、そこに自分の考えやこれからの希望・展望などを書くなど工夫をした作品も見られました。また、カラーの配置を効果的に活用し、目を引く工夫をした作品も多かったように感じます。さらに、入賞を果たした作品ではグラフや表を用いて、直感的にわかりやすくしたものや写真を用いるなど視覚的に訴えかける演出をしたものも見られました。これは、映像時代といわれている現代社会のニーズに合わせた工夫だと言えます。ただ、こだわり強く凝りすぎて色を使い過ぎたり、背景の色を塗りつぶし濃くし過ぎて逆に記事そのものの字が読みにくくなってしまっている作品もあり、惜しかったです。また、例年多く見られますが、空白を作ったり、すべて囲み記事のように線を入れてしまい、新聞としての形になっていない作品もありました。さらに、段組みの罫線や枠囲み線を入れ忘れていた作品も見られました。メリハリのある紙面には欠かせないものですから、しっかりと入れるようにしましょう。

また、新聞は「読み手」を意識して書く必要があります、それには目立つ見出しの工夫、字のミスをせず、学年に合わせた漢字をしっかりと使う努力も必要です。

今年度も個性に富んだ新聞が集まり、みなさんの学習の様子や普段の学校生活の様子を十分見ることができました。来年へ向けて、さらに期待も高まってきます。

最後になりましたが、新聞づくりに対しまして、いつも熱心にご指導を頂いている先生方、保護者のみなさんをはじめ、関係するすべての方々にも心より感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご協力をお願いして「総評」といたします。